

ようこそ畑へ

2008年9月1日(月),4日(木)VOL.12

一つの作物にもいろいろな種類がありそれを「品種」と呼びます。お米なら「きらら397」「ほしのゆめ」など、カボチャなら「雪化粧」「えびす」などです。品種は、大きく分けて在来種（または固定種ともいいます。）と交配種（「F1（エフ・ワン）」）に分けることができます。今の農業ではF1が主流で、新しい品種が次々に発売されていますが、伊達家の野菜は在来種（固定種）と呼ばれる品種だけを選んで使っています。

在来種とF1の違いについて、大まかに説明します。

F1はある品種と別の品種を人為的に交配して作られます。ホームセンターや種苗店で売られている種を見ると、袋に「一代交配」とか「〇〇交配」（「〇〇」は種苗メーカーの名前）書かれたものが多く見られます。例えば、大根Aという品種が生育は早いですが病気には弱いという特徴をもっているとします。これに、病気に強い大根Bを人為的に交配させて、その子どもである大根Cが「雑種強勢」（AとBの良い特徴が引き継がれる）で、成育が早く病気に強いものとなれば、それが新しい品種として売り出されます。これがF1と言われるものです。一般的にF1は、作り易く（成育が早く、揃いがよい）、収量が多いなど、現在の大量生産、大量出荷の農業には欠かせないものです。種苗メーカーはたくさんある品種の組み合わせを研究し、何十、何百通りもの組み合わせの中から、売れる品種作りに日夜努力しています。

一方、在来種（固定種）は、人為的な交配ではなく、ある品種の中から共通の特徴をもったものを選抜して作りだされたものです。例えば、大根Dをたくさん畑に播き、収穫時に、一定の長さ・太さの大根を選んで畑に植え戻し、花を咲かせて種をつけさせ、その種をまた畑に播きます。その中から、また一定の長さ・太さのものを選んで、畑に植え付けて種を採る、ということを繰り返していくと、だんだん一定の大きさに揃うようになってきます。（もちろん、一株一株個性がありますから、完全に同じにはなりません。「ある程度揃う」ということです。）こうして作り出されたのが、在来種（固定種）です。

F1と在来種（固定種）の大きな違いは、次の代に同じ特徴をもった子を残せるかどうか、ということです。上の例で言うと、F1

の大根 C を育てて種をとって、翌年その種を播いて育てた大根は、全てが成育が早く病気に強い性質を引き継いでいるわけではなく、性質はバラバラになって、品質が一定しません。したがって、F1を使うには毎年種を購入しなければなりません。一方、在来種（固定種）は次の世代にその性質が受け継がれていきます。したがって、一度種を買えば、少し手間はかかりますが、自分で種をとって翌年使うことができます。

しかし、在来種（固定種）はある程度揃っているとは言え、一株一株生育にばらつきがあり、一斉に大量に種をまき、一斉に大量に収穫して、大量に出荷するスタイルが主流の現代の農業では、あまり使われなくなってきているのが現状です。トマト、ナス、キュウリ、キャベツなど、在来種（固定種）の品種が手に入りにくい作物もあります。

私たちは、種の安全性に気を配っていきたいと考えています。無肥料無農薬で使わずに育てた野菜から種を採り、次の世代につなげていく、ということを目指しています。そのために、在来種（固定種）を選んで育てています。メノビレッジ長沼で研修をしていた頃から、いくつかの野菜で種採りを続けており、毎年少しずつ自分で種を採る野菜を増やしてきています。

もう一つ、在来種（固定種）を使っている理由として、その味わい深さがあります。最近では、種苗メーカーの研究の成果で、F1にも美味しい品種が出てきていますが、僕は在来種（固定種）の味わい深さが好きです。

ここまでの説明はとても大雑把なものです。F1、在来種（固定種）についてもう少し詳しく知りたい方は、僕が時々種を購入している埼玉県「野口種苗」さんのホームページに詳しく、楽しい解説が掲載されています。トップページ一番下の「タネの話あれこれ」をクリックしてください。

（野口種苗ホームページアドレス）<http://noguchiseed.com/>